

医学科・保健学科・心理支援科学科学生を対象とした

新型コロナウイルス感染対策マニュアル

第2版



2020年6月25日作成

弘前大学医学部医学科 学務委員会

弘前大学医学部保健学科 学務委員会

弘前大学医学部心理支援科学科 学務委員会

弘前大学医学部附属病院感染制御センター

弘前大学保健管理センター

目次

1. はじめに 1
2. 学生の皆さんに対する緊急連絡事項 1
3. 発症時の対応および登校制限 2
4. 新型コロナウイルス感染症（COVID - 19）
病原体・臨床像 3
5. 手洗いと咳エチケット、集団感染リスクへの対応
..... 6

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (Coronavirus Disease 2019, COVID-19) の流行が始まり、わずか数か月ほどの間に世界的な流行となりました。

このマニュアルは、新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の特徴を理解し、体調管理を通じて、感染のリスクを抑えることと、万一感染症が発生した場合の危機管理体制をしるしたものです。

2. 学生の皆さんに対する緊急連絡事項

1. 各自において体調管理に留意し、毎日の体温測定や風邪様症状・インフルエンザ様症状 (発熱, 喉の違和感・痛み, 咳, 頭痛, 全身倦怠感, 関節痛・筋痛, 吐気・嘔吐, 下痢などの症状) のチェックを励行してください。
2. 風邪・インフルエンザ・新型コロナウイルス感染症の初期にこれを鑑別することは不可能です。軽症では自宅療養をされて下さい。症状が重い場合には、最寄りの保健所 (弘前保健所 : 0172-33-8521、青森市保健所 : 017-765-5280、五所川原保健所 : 0173-34-2108) に問い合わせの上、医療機関の受診をお願いします。なお健康状態に不安がある場合は、保健管理センター (0172-39-3128) 、所属学科の学務グループに相談して下さい。
3. 風邪様症状・インフルエンザ様症状がある場合には、無理して登校するなどの行動は控えてください。授業を欠席する場合には、速やかに所属学科の学務グループに連絡してください (医学科 0172-39-5204, 保健学科 0172-39-5911, 心理支援科学科 0172-39-5911)。
4. 特に、臨床実習においては、多少なりとも風邪様症状・インフルエンザ様症状がある場合には、附属病院等での実習に参加することは厳に控えてください (欠席してください)。
5. 所属のクラスや課外活動団体等で、37.5℃以上の有熱者が同時期 (7日以内) に2名以上発生したことを把握した場合には、クラスや担任や課外活動団体責任者等は速やかに所属学科の学務グループに連絡してください。
6. 欠席した場合、必ずしも医療機関受診の証明は必要ありません。まずは、所属学科の学務グループに連絡してください。

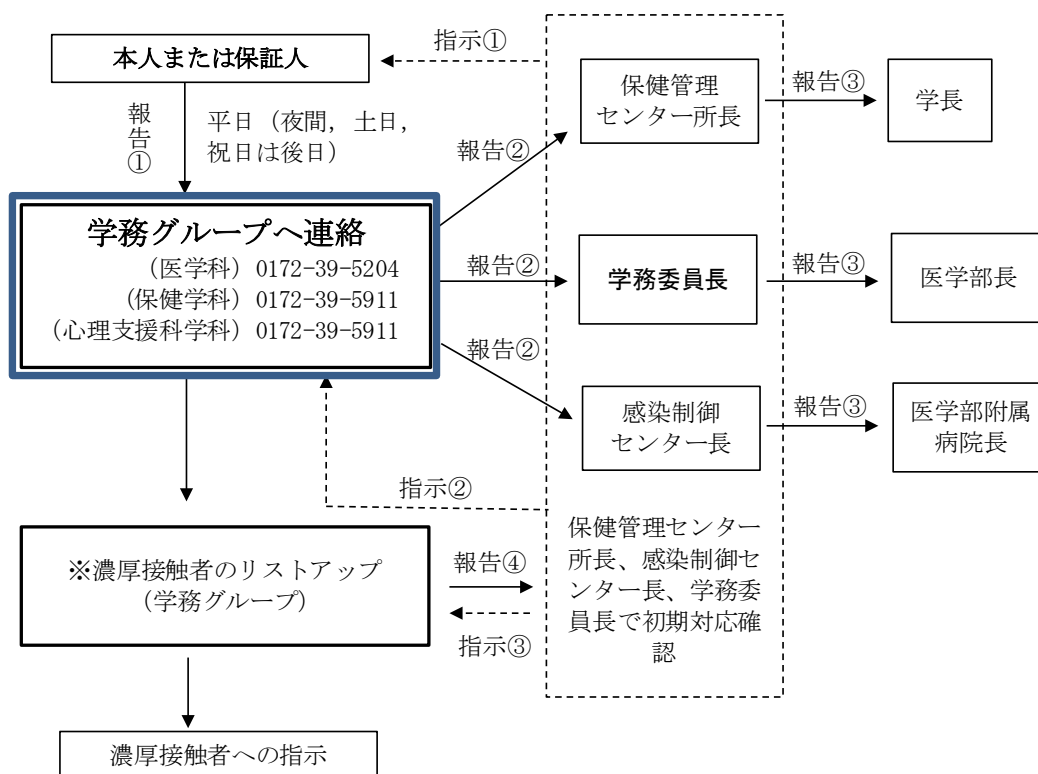
3. 発症時の対応および登校制限

1. 発症時の連絡先、連絡方法

学生が新型コロナウイルスに感染した場合は、学生自身もしくは保証人から各学務グループに連絡してください。学務グループは当該学生もしくは保証人との連絡手段を確保するとともに、保健管理センター長、学務委員長、感染制御センター長に連絡し、情報を共有してください。保健管理センター長、学務委員長、感染制御センター長は相談の上、学生の登校制限、復学の時期、講義や実習の取扱いなどについて具体的に決定し、当該学生、学務グループに指示します（フローチャート1）。

フローチャート1

新型コロナウイルスに感染した場合の対応



※濃厚接触者とは次の範囲に該当するものである。

- ・新型コロナウイルス感染症が疑われるものと同居あるいは長時間の接触（車内、航空機内等を含む）があったもの
- ・適切な感染防護無しに新型コロナウイルス感染症が疑われる患者の診察、看護もしくは介護していたもの
- ・新型コロナウイルス感染症が疑われるものの気道分泌液若しくは体液等の汚染物質に直接触れた可能性が高いもの

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第12条第1項及び第14条第2項に基づく届け出の基準等について（一部改正）」（令和2年2月4日健感発0204第1号厚生労働省健康局結核感染症課長通知）より抜粋

2. 病院実習制限期間及び登校制限期間

症状の消失若しくは検査診断陰性まで（14日程度）。病院実習制限および登校制限の解除については、大学からの指示に従ってください。

4. 新型コロナウイルス感染症（COVID - 19） 病原体・臨床像

「新型コロナウイルス感染症（COVID - 19）診療の手引き・第2版」より引用

1 伝播様式

【感染経路】

飛沫感染が主体と考えられ、換気の悪い環境では、咳やくしゃみなどがなくても感染すると考えられる。また、接触感染もあると考えられる。有症者が感染伝播の主体であるが、無症状病原体保有者からの感染リスクもある。

【潜伏期・感染可能期間】

潜伏期は1～14日間であり、曝露から5日程度で発症することが多い（WHO）。発症時から感染性が高いことは市中感染の原因となっており、SARSやMERSと異なる特徴である。

感染可能期間は、発症2日前から発症後7～14日間程度（積極的疫学調査では隔離されるまで）と考えられる。SARS-CoV-2は上気道と下気道で増殖していると考えられ、重症例ではウイルス量が多く、排泄期間も長い傾向にある。発症から3～4週間、病原体遺伝子が検出されることはまれでない。なお、血液、尿、便から感染性のあるSARS-CoV-2を検出することはまれである。

(Wölfel R, et al. Virological assessment of hospitalized patients with COVID-2019. Nature 2020.)

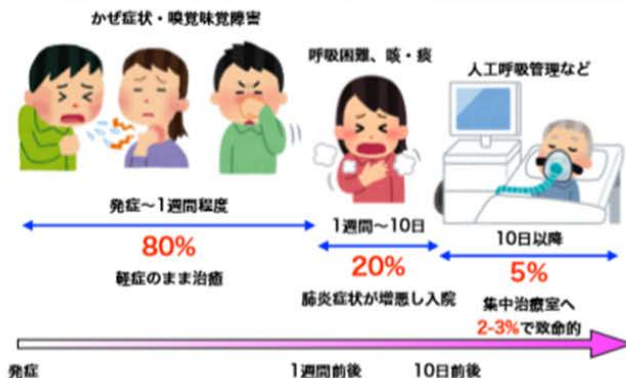
【季節性】

コロナウイルス感染症は一般に温帯では冬季に流行する。COVID-19にも当てはまるか不明である。

2 臨床像

多くの症例で発熱、呼吸器症状（咳嗽、咽頭痛、鼻汁、鼻閉など）、頭痛、倦怠感などがみられる。下痢や嘔吐などの消化器症状の頻度は多くの報告で10%未満であり、SARSやMERSよりも少ないと考えられる。初期症状はインフルエンザや感冒に似ており、この時期にこれらとCOVID-19を区別することは困難である。嗅覚障害・味覚障害を訴える患者さんが多いことも分かってきた。イタリアからの報告によると約3割の患者で嗅覚異常または味覚異常があり、特に若年者、女性に多い。中国では発症から医療機関受診までの期間は約5日、入院までの期間は約7日と報告されており、症例によっては発症から1週間程度で重症化してくるものと考えられる。さらに重症化する事例では10日目以降に集中治療室に入室という経過をたどる傾向がある（図2）。

図2 新型コロナウイルス感染症の経過



【国内のデータ】 (国立感染症研究所の感染症発生動向調査 2020年1月14日～4月22日)

症例数: 10,590例 (確定例9,438例, 無症状病原体保有者1,142例, 感染症死亡者の死体10例)

性別: 男性6,205例, 女性4,383例, 不明2例 (男女比1.4:1)

年齢: 中央値48歳 (範囲0～102)

ICUの入室率や人工呼吸器の導入率をみると, 60歳代以上で急激に増えて, 致死率も高くなる (図3).

症状 (重複あり): 発熱8,136例 (76.8%), 咳4,877例 (46.1%), 咳以外の急性呼吸器症状953例 (9.0%), 重篤な肺炎736例 (6.9%) であった.

【重症化のリスク因子】

高齢者, 基礎疾患 (糖尿病・心不全・慢性呼吸器疾患・高血圧・がん), 喫煙歴のある患者では, 致死率が高い (図4).

【合併症】

若年患者であっても脳梗塞を起こした事例が報告されており, 血栓症を合併する可能性が指摘されている. また, 軽症患者として経過観察中に突然死を起こすことがあり, これも血栓症との関連が示唆される. 小児では, 川崎病様の症状を呈する事例もあることが欧米から報告されている.

図3 年齢別にみた新型コロナウイルス感染症の致死率

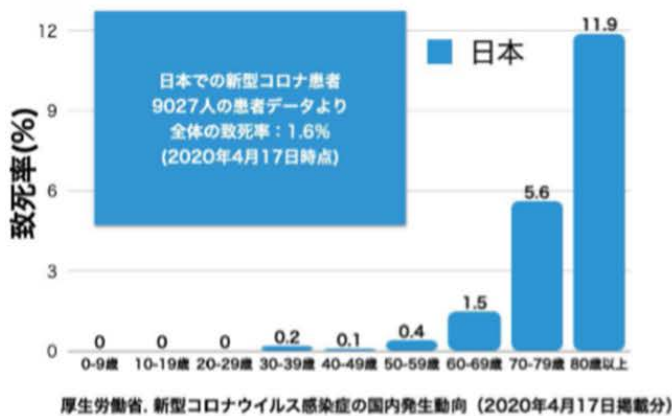
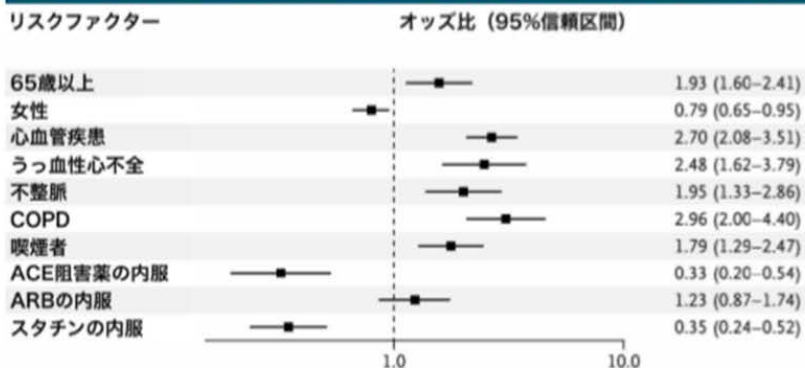


図4 基礎疾患ごとや内服薬ごとにみた新型コロナウイルス感染症の死亡リスク



(Mehra MR, et al. Cardiovascular disease, drug therapy, and mortality in Covid-19. N Engl J Med 2020.)

5. 手洗いと咳エチケット、集団感染リスクへの対応

首相官邸 HP より引用 <https://www.kantei.go.jp/jp/headline/kansensho/coronavirus.html>

1. 感染症対策について

感染症対策のポイントは「感染源を断つこと」「感染経路を断つこと」「抵抗力」を高めることです。特に基本となる手洗いと咳エチケットについては徹底してください。



2. 集団感染のリスク対応について

① 密閉空間（換気の悪い密閉空間である）、② 密集場所（多くの人々が密集している）、③ 密接場面（互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為が行われる）という3つの条件のある場では、感染を拡大させるリスクが高いと考えられています。

また、屋外でも、密集・密接には要注意。人混みや近距離での会話、特に大きな声を出すことや歌うこと、激しい呼吸や大きな声を伴う運動は避けましょう。

